



TITLE:

社会保険の本質とその効果

AUTHOR(S):

中川, 與之助

CITATION:

中川, 與之助. 社会保険の本質とその効果. 経済論叢 1936, 42(5): 907-921

ISSUE DATE:

1936-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130771>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 五 第 卷二十四第

行發日一月五年一十和昭

論 叢

醫と課税

法學博士 神戸正雄

ナイト利子論の吟味

文學博士 高田保馬

經濟學史の基本問題

經濟學博士 石川興二

時 論

最近の貿易構成の變化について

經濟學博士 谷口吉彦

最近に於ける小作爭議の動向と小作立法

經濟學博士 八木芳之助

研 究

社會保險の本質とその效果

經濟學士 中川與之助

パレトの生産均衡論

經濟學士 青山秀夫

價格構成に於ける商業の作用

經濟學士 堀 新一

說 苑

來住の大阪人口構成

經濟學士 青盛和雄

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

研 究

社會保險の本質とその效果

中 川 與 之 助

序 言

社會政策として社會保險(Sozialversicherung)は今日殆ど凡ての文明諸國に普及するに至つた。即ち歐洲にありては獨・英・佛・伊・奧・瑞・白・ルーマニア・ユーゴスラヴィヤ・チェコスラヴィヤ・ブルガリヤ及びロシア等に、歐洲外にありては南米のアルゼンチン・チリーに、東洋にありては部分的であり且つ小規模ながら健康保險等の名の下に日本に於ても行はれ、濠洲にありても社會給助制度の代りに社會保健の思想が擡頭し、久しく強制社會保險に反對の強かつた米國に於ても、非體系的ながら失業保險や養老年齡制が設定せらるゝに至つた。かくの如く社會保險は時代の流行兒となつて來たが、一體それは如何なる本質と效果を有するものであらうか、如何なる程度に於て現代の社會問題を解決し得る能力を有するものであらうか、以下主として社會保險の永き歴

1) Handwörterbuch der S. u. W. Ergänzungsband S. 818-828.
及び Yearbook of social policy.

史を有する獨逸の經驗的事實を基礎として之を考究してみようと思ふ。茲に一言すべきは先に掲げし如く社會保險はロシアにても行はれてゐるのであるが、いふまでもなくロシアの經濟・社會組織は他の資本主義的國家と全然その範疇を異にする。従つてそこに行はるゝ社會保險の本質や機能は資本主義的國家に於けるそれと同視することを許されない。従つて之は考察の外に置く。

第一 社會保險の本質

抑も社會保險が獨逸に創始せられたのはビスマークが社會主義運動を鎮壓せん爲であつた。且つて述べたる如く、²⁾獨逸が普佛戰爭に勝利を占めて佛國から多額の賠償金を獲得したるために戰後に一時的好景氣が現はれたが、忽ちその反動として不景氣が襲來して先づ農村を困らしめた。之を救済せんとして農産物に輸入關稅を課した。所がそれがさなきだに不景氣に惱まされてゐる都市の工業勞働者を一層壓迫するの結果となり、遂に社會主義運動が勃發してビスマークが折角鐵と血とを以て固めかけた獨逸國家の存在を危くするに至つた。茲に於てかビスマークはその社會運動を鎮撫するの政策として徒らに彈壓的手段をとらずして社會保險制度を創案したのである。獨逸の社會保險は爾來幾多の改正や擴張を経て今日に及んでゐる。總べての制度は必ずしも當初の目的や機能を存續するものとは限らぬが、社會保險にありては今日に至るまで當初の政治的目的が失はれずにある。今日までの社會保險の發達史に徴するに社會主義的乃至社會民主的勢力の

2) 拙稿、戰前戰後の獨逸社會事業(經濟論叢第四十二卷第一號)

増大につれて、政治的・社會的の完全辦として社會保險も亦擴張されてゐるのである。かくの如くにして國家制度の中に採り入れられたる社會保險は然し乍ら他の經濟的・社會的の制度と無關係に且つ非體系的に存在し得るものではない。その性質や地位が自ら規定せられなければならぬ。然らば今日社會保險は法律的經濟的のいかに觀念せられてゐるか。

(A) 社會保險の法律的概念³⁾——「社會保險は不確定の事項即ち保險事項の發生に際して、公法的自治體——それは本質的にはその資金を自ら徴收する——に對して、公法的の賠償請求權を與ふるものである。而してその特質は(イ)保險強制(Versicherungszwang)にある。蓋しこれを個人の自由に委すれば積立金も少く到底大なる社會目的を達し得ざるが故である。(ロ)保險事項の發生と共に保險給付の請求權が發生するのであつて、救貧事業(Armenpflege)の如く必要原則(Bedürfnisprinzip)によつて定まるのではない。(ハ)社會保險は公法上の權利・義務に基くものであり、且つそれは本質として國家財政を煩はさぬ様に運用せらるべきものとなす。社會保險は一の目的を以て成立したる強制的自治體である。然しそれは個人生活の自己責任主義の原則に基くものであつて、國家や社會が各人の生活の保證をなすといふ社會的な原則の上に立つものではないのである。社會保險の法律的性質を明にするために更にそれを密接の關係にある他の制度と之を比較せねばならぬ。社會保險は前述の如く(イ)救貧事業や福利事業(Wohlfahrtspflege)と異なる。前者は保險原則(Versicherungsprinzip)によるが後者は必要原則による。前者にありては國庫の補助は

3) Die Deutsche Sozialversicherung seit 1914 (Arbeitsgemeinschaft der niederrheinischen Verwaltungsakademien. Heft 2 der Schriftenreihe) S. 12-19. 及び Handwörterbuch der S. t. W. Band VII S. 626-637.

例外的と考ふべきであるが後者にありては寧ろそれが主となる。(ロ)社會保險と勞働法(Arbeitsrecht)は共に社會法(Sozialrecht)を構成するものであるが、後者は私法的な勞働關係を規定し更に進んで社會的な保護法として勞働に關する損害を防止せんとするのであるが、前者即ち社會保險法は損害防止を勿論考慮するが、それよりも先づ第一に損害の補填をなすのである。(ハ)社會保險は私保險(Privatversicherung)と異なる。一は公法的強制保險であるが、他は私的任意保險である。併し社會保險も保險として私保險の原則に據る所を尠しとせぬ。例之、時效の制度を採用してゐるが如き或は忠實・信賴の原則の如き之である。

(B)社會保險の經濟的概念——個人主義的生活原則をとつてゐる資本主義社會にありては勿論企業家階級は勞働階級の生活を保證すべき社會的義務を負はない。然らば社會保險に對する企業家の掛金負擔は經濟的には如何に之を解すべきものであるか、社會主義的給付に非ず又恤救的給付でもないとすればそれは何か、今日までは理論上賃銀補充(Lohnergänzung)とせられてゐる。かく觀念する事によりて資本家階級は勞働階級からの過多の要求を斥け、勞働階級も之を權利として要求するので資本家階級からの救恤や施與をうけるのではないとせられる。而して之を賃銀補充となす理由は次の様である。⁴⁾「勞働者が勞働能力を有して勞働に従事してゐる日の賃銀は常にその場合の生活必要を充すのみならず、更に當該勞働者が少年時代に受けた養育及び教育費をも償却し且つこれが疾病・老年の際に要する費用と勞働に伴ふ健康上・生命上の危險に對する費用

4) L. Heyde, Abriss der Sozialpolitik S. 105-106 及び E. Heimann, Soziale Theorie des Kapitalismus S. 176.

等に充當するものでなければならぬ。企業家が生産物の價格として少くとも生産費の補償を求むるが如く労働者に對してもその労働の生産費を補償しなければならぬ。労働の生産費とは生活費 (Lebensunterhalt) であり、それは積極的に労働してゐる日のみならず教育及び疾病等の不生産的時代の生活費をも含むのである。これら生活費あるによりて始めて労働力は社會的に再生産せられ得る。所が労働市場に於ける自由契約に放任せれば賃銀がこの限界に達せざるが故に、これを補ふ方法として社會保險を設くるのである。されば社會保險は公法的救護 (öffentliche Fürsorge) に非ずして正しき賃銀の保證であり社會正義の命する所なりとする。かくてこの理論に據れば社會保險は企業家階級から労働階級に拂ふべき賃銀の未拂部分を社會的に收奪する組織であり、労働階級の生活の社會的・集團的保證制度である。かゝる考へ方は社會民主的であるが、それは正しくナチス革命前に於ける獨逸の支配的理論であつた。同一の制度もその基礎となつてゐるイデオロギーによりて効果を異にする。以下の考察は以上の如きイデオロギーの下に行はれた獨逸の經驗を基礎とする。

第二 社會保險の効果

社會保險の効果は之を經濟的・社會的・政治的の三方面から考察し得る。

(甲) 經濟的效果 (イ) 社會保險が資本蓄積 (Kapitalbildung) を阻害するか否か論議の的とな

5) かくて社會保險の給付は Lohnanteil Bestandteil, des Lohnes. Lohnbestandteil 或は Soziallohn であり ergänzende Bedarfsdeckung であるといふ。

(註一) この問題には資本の意義の限定を要する。資本の語は多義は使はれる、最も普通には物財

(Sachgüter)として資本即ち物質資本(Sachkapital)と貨幣として資本(Geldkapital)が考へられる。社會保險は企業家から社會保險の掛金として購買力を強制的に徴収するが故に、彼が貯蓄すべかりし或は新に投資すべかりし貨幣資本を減するは明かである。貯蓄による資本蓄積(Sparkapitalbildung)や企業そのものから生み出す固有の資本蓄積(Eigenkapitalbildung)を妨ぐる。併し社會保險がその徴収したる購買力を労働階級の労働力の再生産に、或は病院・療養所等の物的設備に使用したりとすれば、一には人間の身體に投ぜられたる資本として他には社會的な物的資本として資本性そのものが消失したわけではない。この意味に於て社會保險は個人的にみれば貨幣資本の蓄積を阻害するが、社會的・國民的にみれば必ずしもそれは當らぬ。況んやかくて労働者の身體に投ぜられたる資本或は社會的物的資本と化したものが、懸て再び巡りくりて労働の能率を高め企業家の収益を大ならしむるに至つては、永い目でみれば必ずしも各個企業家の資本蓄積を減するとは限らぬのである。以上のことは社會保險として奪はるゝ労働者の掛金負擔の行方に就ても亦同様である。唯企業家にとりては社會保險のかゝる間接的な且つ將來に互る効果を云々してゐる餘裕なく、當面の問題として社會保險に資本を奪はれ、爲に企業の經營が不利となり或は得べかりし利潤を逸する場合も尠しとせぬであらう。一定の具體的な經濟狀態に於ける經濟政策として貨幣資本を擁護すべきか物的或は人的資本(労働力)を擁護すべきか、或は二者の均衡を如何に

(註一) 以下の所論に就ては Prof. Hermberg, Kapitalbildung und Sozialpolitik S. 5-13 及び Der wirtschaftliche Wert der Sozialpolitik 1931. S. 191-203 参照

すべきかは慎重なる考慮を要する問題であらう。例へば貨幣資本の缺乏の場合には資本の供給が悪く従つて利子も自ら高くなりそれが企業を壓迫し失業を生み労働條件を悪化する。高率の利子負擔を免れんために一國の貨幣資本を潤澤にすべき必要が大である。労働力の保持もとより必要であるが、安い貨幣資本を利用することが更に緊急となつて來る場合が生ずる。企業上の競争が世界市場に行はる場合特にこの問題が重要となる。社會保險が一時的に緊切なる需要を有つ貨幣資本の蓄積を妨ぐることもあるも、資本の概念を物的なるものに擴充し且つその効果を將來に互りて考察する場合一概に資本蓄積を妨ぐることなし難い。(註二)社會保險は企業精神や労働精神に如何なる影響を及ぼすか、凡て社會の精神は色々の方面からその影響をうけるのであつて社會保險のみの影響を抽出するのは不可能であるが、暫く他の條件を考慮の外に置けば、先づ小企業家は一般に社會保險の掛金負擔の如き所謂社會負擔(Soziallasten)を轉嫁する能力少く企業に受ける打撃が大きい。その負擔が餘りに大となれば彼は寧ろ労働者となりて安全なる年金生活を選ぶに至る大企業は之に反し企業の合理化とか或はトラストやカルテルの結成によりて之を轉嫁し得る可能性を有する。従つて社會保險のために大企業家の企業心が、その負擔の極端ならざる限り、俄かに萎靡するとは考へられぬ。労働者が社會保險あるによりて労働精神を弱めるか否かも論斷に困難なる問題であるが、一旦老廢者となり失業者となりても社會保險によりて一應の救済をうけ得ることになると、これらの經濟的危險に豫め備へるために平素から奮闘努力する必要が薄らぐ

(註二) (ロ)(ハ)(ニ)に就ては J. Winschub, Grenzen der Sozialpolitik S. 61-64. 及び Prof. Briefs-Berlin, 論文 Die Volkswirtschaftliche Bewertung der Sozialversicherung (前掲 Die Deutsche Sozialversicherung Seit 1914, S. 20-29.) 参照

は事實である。加之、彼が社會保險の掛金のために自由貯蓄の餘裕は殆どなくなり、それを蓄積して企業を試みるといふが如き可能性は失はれる。彼にとりては老廢・失業の場合の運命を國家・社會に托し平素は忠實なる社會保險の掛金者となるの外希望がない。事實の問題として獨逸では戰後、一面には經濟的疲弊の結果でもあらうが、一般に年金氣分(Rentengeist)が横溢して、民衆は徒らに國家・社會からうくる年金に縋りて敢爲奮闘の精神を捨て、社會に於ける活氣と創造はなくなつたといはれる。而して識者は之を國民の年金病(Rentenhyserie)と嘆じた。(一)社會保險は生産的か不生産的かといふ問題もあるが、この場合論者のいふ所は社會保險の經費が消費にむけられて直接に生産にむけられざることを難する。併しこれは(イ)の項で述べたる如く、勞働者に對し營養を與へ醫療を施し健康を回復する等のことは必ずしも單なる消費に止まるものに非ずして生産的な効果を齎すのである。消費するが故に不生産的なりとはなし難い。況んや社會保險の經費は一部は物的資本として社會的に蓄積され一部は財産として貨幣資本として蓄積され全部が消費にむけられるに非ざるに於ては尙更この論難は當を得ないことになる。(二)社會保險によりて社會的資本が國家意志の下に動員されて一定の方面にむけられる。即ちそれは統制資本となる。そしてそれだけ社會に於ける自由資本の量を減するわけであるが、その統制資本によりて特定の生産が起り、分配制度が調整せられ勞働階級の消費生活が計畫化・合理化される。社會はこれによりて質の良き豊富なる勞働力の供給を仰ぎ得る。社會保險はこの意味に於て一國の生産・

分配消費を左右する。それは自由主義經濟秩序の中に統制經濟的領域をとり入れたものであり、その限りに於て社會經濟の根本體系はそもつ缺點を減するが、同時に又その機能を弱める。失はれる長所と減ぜらるゝ短所とが何れが大であり何れがより緊切なものであるかは興味ある問題であらう。吾人は次の項に於て更に之に觸れようと思ふ。

(乙)社會的效果⁶⁾ 現存社會の立場から社會保險の社會的效果の先づ長所と考へらるゝものをあげれば、(イ)社會保險は社會安定の作用をなす。即ち之を勞働者個人に見るも、社會保險があるによりて疾病・失業・老廢に際しても俄かに糊口の途を斷たるゝの虞れなく、生涯に於ける經濟上の順逆がいはゞ平均される。之を社會的にみれば勞働階級の生活が安定すれば、有産・無産兩階級に於ける不和・軋轢も緩和されて社會全體が安定する。(ロ)社會保險によりて民衆は社會化による合理主義を學ぶ。社會保險によりて國民の財産・所得の一部分が社會化されて、個人的に分散してゐたならば擧げ得なかつたであらう大なる經濟的效果をもたらず。舊に財産や所得が社會化さるゝのみならず、國民の思想も亦社會化され、利己や我執を捨つるによりて多くの人々が生き得ることを知る。この財産所得及び思想の社會化は現在組織の存續發展の上にも多くの可能性を發見するであらう。(ハ)社會保險は社會文化を平均する作用を働く。社會保險は廣汎なる勞働階級に對する生活の集團的保證制度である。勞働階級はこれあるによりて生活の極度の窮乏や危険から解放せられ、體力や健康のみならず精神的能力や教養等に於ても一定の程度にこれを收得

6) 前掲 J. Winschuh, Grenzen der Sozialpolitik, 及び Der wirtschaftliche Wert der Sozialpolitik, 並びに Die Deutsche Sozialversicherung Seit 1914 參考

することが出来る。即ち社會保險は國民の廣汎なる階層に亙りて平均的な文化を普及せしめ之を保持するの機能を有す。社會文化の平均然も之を一定の標準以下に低下せしめないといふことは、國民の幸福であるのみならず國民活動を大ならしむるは言ふを俟たぬであらう。社會保險には上述の如き長所あるも、個人主義的社會機構から觀て短所も亦なしとせぬ。(イ)社會保險によりて社會が固定化・化石化する。既に述べし如く社會保險は企業家精神や勞働精神を減殺して、年金病への誘導が免れ得ないのである。人々は波瀾多き生活戰線上の苦闘よりも退いて確實・安易なる年金にありつかんとするの結果は、現存制度を只管に守り、現在の地位を死守して可成その變化を避けやうとする。この退嬰的精神は甚だしきに至りては、賃銀と失業年金額とを比較計算して自ら失業者の數に列せんことを望むにすら至る。獨り社會保險は人々の國家や社會に倚賴するの心を助長するのみならず、掛金負擔のために勞働階級に自由蓄積の餘地なく従つて物質的にも奮闘の土臺が失はれるといふことも先に述べし如くなるが、更に又社會保險によりて多くの經濟的社會的弱者が救済せらるれども、經濟的・精神的優秀者が常にそれらの犠牲になり、かれらの飛躍を抑へることを注意すべきである。少數の有爲敢行の人々が屢々その社會の進運に大なる貢獻をなすは人のよく知る所なるが、社會保險は大衆を救ふが他面には人々を標準化・平均化・平凡化する。かくて社會に創造なく躍進なく沈滞し固定する。社會生活は餘りにも機械化し形式化する。(ロ)社會保險は個々人の經濟的危險を社會的に集中する。社會保險がなかりせば各人の遭遇

するであらう經濟的危險は、或は多くの私保險によりて、或は又國家親戚間の相互扶助によりて、或は諸種の隣人愛に基く社會事業によりて、非體系的であり部分的ではあるが救はれる。いはゞこれらの危險は社會的に分散してゐる。然る社會保險によりてこれらの危險は組織的に且つ一般的に救濟されるが、その危險はこの制度の直接間接の運用者たる國家に集中する。社會保險は分散してゐる危險を社會的に集中的になくしようとする組織である。一國の經濟や財政が順調なる場合には、この制度の秀れたることはいけまでもないが、一旦逆調の場合に遭遇すれば、大量的な集中せられた危險を救濟するは不可能となり、且つそれを救濟せんとして却つて經濟や財政を亡ぼすに至るであらう。^(註三) 況んや社會保險の發達のために人々が益々個人的となり家族愛や隣人愛を失ひ、かれの生活が國家對個人の權利義務の關係のみにて營まれて行くに至れば、人類社會の一の墮落といはねばならぬ。(二)社會保險のために資本の集中獨占を促す傾向がある。既に述べし如く社會保險の掛金負擔は企業家としては極力之を轉嫁せんことに努力する。この轉嫁に當りては小企業家よりも大企業家の能力大なるが故に、競争上小企業家の立場は益々不利となりて、勞働階級に没落するの可能性を大ならしめ、大企業家は益々トラスト・カルテルの城壁に立て籠るであらう。かくて企業家に對して社會負擔の大なることは、中小企業家を亡して大企業の獨占を助長するの結果となる。國民は大企業家と勞働階級とに分裂して中等階級が轉落してゆく。個人主義社會に於ける資本家階級と勞働階級との橋は失はれ社會の交流現象は薄らいで、基本組織

(註三) 之に就ては拙稿「ナチス革命前に於ける獨逸の社會費」(經濟論叢第四十二卷第三號)參照

の存在を危うする。(二)社會保險は離村向都の勢を助長する。都市に於ける労働者の生活が社會保險によりて安定せしめらるゝことゝなれば、人々は文化の程度低く且つ生活の單調なる農村を捨てゝ、職業に變化の多き文化の高き都市に流れ込むであらう。かくて都市膨張の勢は一層甚だしくなりて都市は失業を始め多くの労働問題に悩まさるゝに至る。

(丙)政治的效果 現存政治組織から觀て社會保險のもつ政治的效果の中先づその長所を述べんに(イ)國民生活の安定による政治機構の安定である。社會保險によりて労働階級の物質的生活に安定が齎らさるゝのみならず、社會保險の負擔に企業家も、又場合によりては國家も之に任ずるといふことは、資本家階級の横暴を制肘するものであり、且又國家理性の發展と考へられて、精神的・感情的にも、社會・國家に反抗せんとする思想を和げる。(ロ)社會保險は國民の生活を密接に財産や經濟組織に結ばしめるが故に、個人と全體との關係、全體經濟と個人經濟との關係をよく學び、國民は自ら理智的批判的になるのみならず、社會保險からうけ得る給付に對する利害の打算からも、盲動を抑へ過激なる破壊的・革命的運動を阻止する。この點に於て社會保險は今日と雖もビスマルク時代の反革命の役割を演じてゐる。(ハ)社會保險によりて國家が國民の労働力・知力の涵養に直接于與する。國民の労働力・知力を平均的に且つその程度を高むることは、資本家的富の蓄積能力を高むる所以にして、國家は之によりて重要な労働政策の目的を達し得る。加之、労働階級の體力・知力の向上が一朝有事の際に優秀なる兵士の國防力となりて現はるゝは

明かにして、この意味に於てそれは又一の國防政策でもある。(ニ)社會保險なくんば勞働上殊に傷害の賠償問題などに就ての裁判はその煩に堪えぬのであるが、疾病・癈疾保險のお蔭によりてこの煩累と經費から免れる。尙又、社會保險なきに於ては生活上の不安から頻發するであらう社會的暴動・犯罪、さては醫療設備の不完全から生ずるであらう各種病氣の防止に要する經費等を免れ得る。吾人は以上の如く社會保險の政治的長所を數ふれども、翻つて又、現存政治機構に對して幾多の願はしからざる機能をも有するのである。今その短所を擧げんに、(イ)社會保險が勞働階級にとりては生活問題であり、企業家階級にとりては企業負擔の問題となるが故に、これが改正・擴張はその時毎に政治問題となりて紛糾する。勞働階級の政治化は必ずしも排斥すべきことに非ざれども、ために政治鬭争を激成し屢々現存政治機構の脅威となる。(ロ)社會保險に對する國家の負擔は、社會保險の擴張するにつれて増大し、それが延いて財政を壓迫し、他の政費を抑へるのみならず産業の壓迫となる。政府は社會保險あるによりて勞働及び兩階級から壓迫をうくるに至る。財政及び經濟政策に於ける自由が大いに縮少せらるゝを知らねばならぬ。(ハ)社會保險の制度は國民生活を國家が統制するものであるが、その制度の運營には自ら複雑なる幾多の公的機關を要し、國民生活に於ける官僚的組織と氣分を濃厚にする。その組織が經營を誤り、例之、その行政費が徒らに嵩むとか或は保險事務の取扱が不親切であるとか手續が繁瑣であるとかといふことになれば、官僚組織に對する國民の反感を募り、極端に至りては社會保險はかゝる官

僚群の生活のために設けらるゝときへ非難さるゝに至る。(二)社會保險は財政上の彈力を失はしむる。抑も財政も經濟と共に常に景氣・不景氣の波に搖られて進行しつゝあるものであるが、不景氣の場合にそれを取り切るにはその負擔を軽くせなければならぬ。然るに財政が大なる社會負擔を背負ふ場合にはこの危急に對する方策の講じやうがない。然も一般にかゝる財政上經濟上の危機に於て一層社會の社會保險に對する要求が大となつて現はれるのである。かくて社會保險の重壓の爲に財政も經濟も而して社會保險そのものも遂には崩壊せざるを得なくなる。(ホ)その他社會保險が社會的危險を集中することのために、國家の責任が一層重大化することや、社會負擔の爲に中等階級が没落して行く傾向を助ける等は他の項の下で述べし所なるが、それが政治的に不利であることは言ふを俟たぬ。

結 言

以上を以て吾人は社會保險の本質と效果との考察を了へた。既に述べたる所によりて明かなる如く社會保險は經濟的・社會的・政治的に多くの長所を有するが、同時に又多くの短所を顯現的に或は潜在的に有するのである。崩壊せんとしつゝある資本主義社會がこれによりてその缺陷を補整しつゝあるが、その政策そのものに資本主義・個人主義を揚棄せんとする幾多の成素の内在してゐることを否むわけには行かぬ。例之、國民の勞働心・企業心を鈍らせて年金病を漲らするが

如き社會が固定し形式化し官僚化して潑刺たる創造と努力の氣風が失るゝが如き、離村向都を助け獨占化を促成し社會問題を更に擴大するが如き、又、國家の手に徒らに大なる責任と負擔を集中する如き、何れも資本主義體系への弱化作作用とみなければならぬ。各國はこれらの社會保險に伴ふ短所を認めつゝも、勞働階級の生計窮乏といふより緊切なる問題の爲に之を採用し擴張しつゝあるのであるが、これが資本家社會を救ふ最善唯一の方法であるとは到底考へられぬ。社會保險そのものに内在する自己矛盾が益々發展して行く場合、國家は必ずや何らかの轉換を試みねばならなくなるであらう。さりとて今更社會保險をすてゝ、もとの自由放任時代に歸れといふことは、社會的大衆的の窮乏を前にして、然も既に社會的訓練と組織とによりて、より合理的な生活方法を一度體驗したる民衆に之を要望することは不可能である。結局新しき政策を以て之に代へるか、或は在來の制度の運用を新にするかの道を選ばねばならぬであらう。この意味に於てナチス革命の精神並びにそれが社會保險に對して採らんとする態度は吾人に深甚の興味を與へる。

(一一・四・二)